

わらわら

春号



民話を楽しまおう

民話 ゆうき 一ツ木どん

文・結城市教育委員会
挿絵・佐々木 明

むかし、東茂呂に

一ツ木どんとよばれる、たいへん力もちの男がいました。

ある日のこと、用水

のふちが草でおおわれていたのできれいにしたいと思いました。

一ツ木どんは金物屋

に行つて、

「大きなかまを作つ

てほしい。」

といいました。



「たいへん力もちの男がいました。」



2

金物屋の主人が、

「このくらいのかまですか。」

と聞くと、「一ツ木どんは、

「目方」として一貫匁くらい

(三・七五キロ)のかまを作っ

てくれた。」

と聞いて注文しました。

「そんなに大きなかまをどう

するのですか。せっかく作つて

も使えないでしょう。」

と聞いて相手にしませんでした。

しかし、「一ツ木どんは、

「どうしてもほしいのです。

使うのです。」と聞いて熱心に

主人にたのんだので、

「このかまを使うことができ

たら、お金はいりませんよ。」

と聞いて、しょうちして

くれました。

★わらわら協賛店十一七引換手形
有効期限：2011年
4月わらわら発行～
6月30日まで

3

一週間ばかりすると、かまができあがったので、一ツ木どんはよろこんでかまを受け取りかえり道さっそく用水の草をきれいにかつてしまいました。そして、かまを見ると金物の部分がすりへって、ほとんどなくなっていました。

金物屋かなものやの主人に見せたところ、大へんおどろいて、

「よく使いましたね。一ちよう作ってあげましょう。」といって、代金たいきんもとらずに作ってあげました。「一ツ木どんは、うれしさのあまり、みんなにいいふらして歩きました。

「どうじゃ、わしほどの力もちはおらんじゃろ。」

じまんしていたある日、戸がくろのところのでなっている野良のらねこにえさをやろうとして、うっかりぶんでしまいました。

大男にぶまれたからねこはひとたまりもありません。

たちまち死んでしまいました。

4

一ツ木どんは、大男のわりにきはやさしいほうでしたから、泣いてねこにわびるのでした。ねこのなきがらを三ぎろのところまで運び、かたわらにほうむってやり、とむらいました。

一ツ木どんは、そのことがあってから、いつも背を小さくまるめて歩き、自分を責めていたようでした。いつしか元気もなくなり、力も、うしなつたかのように動かずに、家にひきこもってしまいました。



5

そんなある日、ひとりの子どもがあわてて家にとびこんできました。

「一ツ木どん、助けてくれ！」

おば、おば、おばあさんが木の下じきに……。」

よく聞いてみると、村はずれにある杉すぎの大木たいぼくがたおれて、おばあさんが下じきになってしまったということです。

6

これを聞いた「ツ木どんは、ふしぎに力がわいてくるのをおぼえました。

「よし、やってみよう。」

一刻をあらそう時です。「ツ木どんは言うが早いか表へとび出していました。

黒山の人だかりの中にわってはいり、かるがると大木をよせてしまいました。

見ていた人たちは、

「みんなでかかってもよせられなかったのに。」と、おどろきました。

7

ふたたび自信をとりもどした

「ツ木どんは、その強く大きな

からだをやさしさで村中の人気者になり、しあわせにぐらしました。

その後、この地を「ツ木とよぶ」ようになったということです。

おしまい

